

コロナ禍におけるオンライン学会開催に関する省察 —養護実践の論文化を目指す学会運営の成果と課題—

Reflections on Online Academic Conferences During the Covid-19 Pandemic: Results and Challenges of Academic Societies Attempting to Adapt School Nursing Practical Training into a Written Form

八木 利津子*1 米野 吉則*2 平松 恵子*3 新沼 正子*4 安達 有梨*1 池田 友美*5
古株 ひろみ*6 三宅 孝昭*7 高島 智香*8 中島 道子*9 矢本 良江*10 錦川 由美*1
宮坂 政宏*1 徳山 美智子*11

YAGI Ritsuko*1 KOMENO Yoshinori*2 HIRAMATSU Keiko*3 NIINUMA Masako*4,
ADACHI Yuri*1 IKEDA Tomomi*5 KOKABU Hiromi*6 MIYAKE Takaaki*7
TAKASHIMA Chika*8 NAKAJIMA Michiko*9 YAMOTO Yoshie*10 NISHIKIGAWA
Yumi*1 MIYASAKA Masahiro*1 TOKUYAMA Michiko*11

*1 桃山学院教育大学, *2 兵庫大学, *3 姫路大学, *4 安田女子大学, *5 摂南大学, *6 滋賀県立大学,
*7 大阪公立大学, *8 京都市七条第三小学校, *9 長浜市南中学校, *10 京都府立山城高等学校,
*11 元大阪女子短期大学

〈要 約〉

当該学会は、養護学の確立のために、養護教諭が行う教育実践を研究的視点で捉えて、経験や実践を言語化・体系化を目指している。そこで、2021年度学術集会において「新しい生活様式の中で養護実践を論文化するには」とメインテーマを設定し、基調講演、特別講演、特別研究発表、シンポジウム、一般演題、懇親会をオンライン開催とした。開催後に企画運営の趣旨や実施概要等を省察することを本研究の目的とした。多領域で構成した運営委員が、できる限り対面に近いオンライン学会を目指し企画したところ、研究的視点の幅を広げることができ、参加者アンケートの結果から参加満足度は満足 57%、やや満足 39%であった。今後は、オンラインのメリットを活かし若年層や子育て層など年齢を問わず参加者が一体となって創る企画進行が望まれ、成果と課題を振り返ることで、増加し続けるオンライン学会に寄与すべき新展開を追求したい。

キーワード：養護実践の論文化、コロナ禍、オンラインにおける企画運営、参加者アンケート、省察

I. 研究の背景

当該学術集会の2021年度開催は桃山学院教育大学が開催地となった。当該学会（以下本学会

と表記) 設立の趣旨は、養護学の確立のために、養護教諭が行う教育実践を研究的視点で捉えて、経験や実践を言語化・体系化することであり、そのことが本学会の目指すところである。

古田¹⁾らは、「実際に、学校現場で行われている養護教諭の活動の多くは、自らの経験あるいは他の養護教諭の経験に基づくものがほとんどであり、それらの意味や意義を科学的に検証して報告された「研究」の蓄積は、残念ながらほとんどないことが明らかになっている。」と述べており、養護実践を研究的視点で検証し、記録として残していくことの重要性を言及している。

さらに徳山²⁾は「実践者と研究者の協働による養護実践学研究により、「養護学」が体系化され、社会評価に耐え得る真の「養護学」として定義づけられ、社会に貢献していくものと確信している。その定義づけのための協働は、養護教諭が積極的に研修や研究に取り組むことができる環境整備（教育公務員特例法等関係法規及び職場環境等を含む）なくしてなしえないことである。」と述べている。

また、村松³⁾は、一方で未だ養護教諭の「養護学」としての体系化の構築に繋がっていないのが現状と述べており、本学会の設立によって「学校現場で養護教諭が行っている教育実践を科学的に整理し、言語化して誰もが理解できる論文、誰もが納得できる論文として学会誌、養護実践学研究に積み重ねていくことが、養護教諭のための養護学の体系化の構築ならびに学問的位置づけに貢献できるのではないかと」学術集会の課題を捉え、今後の展望や期待感を明言している。

これらのことから、養護教諭がエビデンスを創出するために本学会の果たす役割や設立目的として、達成できているところと課題が残されているところを検証し、より現場の養護教諭にとって必要とされている情報を改めて精査し発信することが、本学会の発展並びに養護学の確立に重要な役割を果たすと考える。また、学術集会の開催に向けては、本学会の設立理念に留まらず、養護実践の研究が、養護教諭の能力向上にも重要な役割を果たすことを念頭に運営企画を検討することが肝要と考える。

渡辺ら⁴⁾は、「実践の発表経験を積み重ねることが研究活動へつながることに加え、「実践検証」である日々の振り返りの検証が研究活動に生かされ、力量形成につながっていくことが推測される」と指摘している。すなわち、養護教諭の実践研究は、職務に対する自己効力感を向上させる要因でもあることから、自身の養護実践を日々省察し、その実践で生じた課題や疑問を整理することで、現場の児童生徒に還元し、養護実践の確信につながると換言できよう。

そして、その研究を論文化することで自身の実践が他の養護教諭や現場に還元するヒントにもなる。田嶋⁵⁾も「自らの養護実践や学校保健活動を振り返り、研究的な視点からの取り組みを実践することにより、児童生徒の健康の保持増進につながるのではないかと」自らの経験に基づき提言している。今日の教育現場では、感染症対策を筆頭に深刻で複雑な問題が絡み合う課題解決に対しても、養護実践を科学的に検証することが課題解決に繋がり、目の前の児童生徒の健康維持に還元される。その養護実践のプロセスを検証することは養護教諭の将来にとっても大きな意義があり、論文化を目指す養護教諭の拡がり益々求められている。

しかしながら、全国の養護教諭の本学会への論文投稿の結果、これまでに掲載された論文数

は36本であり(詳細, 2018年1号10件, 2019年2巻1号10件, 2019年2巻2号7件, 2020年3巻9本), 養護教諭が単独で執筆に至った演題は3本に留まっている。これは, 日々の養護実践に追われている表れであろうと推測され, 平時の実践を振り返る時間確保が困難であることや, 研究への探求までに時間を要している現状があるのかもしれない。一方, 現場の養護教諭と共に大学教員が実践介入したり, 調査介入したり共同研究者として執筆された論文の投稿数においても, 本学会では一定数はあるものの著しい増加傾向はみられないのが現状である。

そこで, 本学会の趣旨に即してオンライン開催に依る学会運営を省察し, 過去に開催された学会の内容などを比較しながら, 各プログラムの到達点と課題について検証を行なっていく。今回開催された学術集会は, 世界的情勢を踏まえてオンラインで開催することが運営委員の複数回に渡る話し合いの末, 決定した。そのため, オンラインでの開催の参加者の募集や告知の方法, さらには, 運営を円滑に行う方法, 及び参加者が気軽に質問しやすい方法など運営委員(会)という組織が試行錯誤することによって無事に開催することができた。

本学会が, 様々な経験や実践を振り返る機会となったのか, また, ライブ配信した企画プログラムは, コロナ禍において日頃の養護実践を研究的視点で捉え, 論文化に繋がる課題意識を見出す内容であったのかなどを明らかにすることが本論文のねらいである。

II. 研究の目的

養護学の確立のために, 養護教諭が行う教育実践を研究的視点で捉えて, 経験や実践を言語化・体系化することが本学会の目指すところである。

そこで, 2021年に開催した学術集会の運営企画は, これまでの様々な経験や実践を振り返る機会となったのか, また, ライブ配信した企画プログラムは, コロナ禍において日頃の養護実践を研究的視点で捉え, 論文化に繋がる課題意識を見出す内容であったのかなど, 養護教諭にとって今回の企画運営が研究の道を探るための可能性や効用について検討する。

III. 研究の方法

本学会の開催後に企画運営の趣旨や実施概要等を振り返り, 「基調講演」、「特別講演」「特別研究発表」, 「シンポジウム」, 「その他のプログラム(一般発表, 懇親会)」について各企画の趣旨や目標, 実施概要をそれぞれで省察する。また, 参加者アンケートの回答者や参加のきっかけ, 満足度の結果を示すとともに自由記述欄のKHCoder3を用いた計量テキスト分析を行う。そして, 【コロナ禍での養護実践】【教育実践の論文化】【研究仮説の構築】【課題意識】【オンラインのメリット・デメリット】の5観点から①運営趣旨と目標②実施概要③成果と課題について省察する。また, 倫理上の配慮として, 参加者アンケートは, 所属機関の研究に関する倫理指針に基づき個人情報を守り Google フォームを活用し本学会の発展と改善など目的を明示の上, 個人を特定できないように取り扱い, 回答をもって同意が得られたものとした。結果についても特定の人物しかアクセスできないクラウドに保管し情報漏洩の心配がなく調査データの

安全管理の徹底を図った。

IV. 各プログラムの結果と考察-1

(1) 基調講演

①運営趣旨と目標

2020 年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の影響により想定外の緊急事態が布かれ、現在も厳しい社会情勢が続いていることに変わりなく、子どもたちのいのちと健康を守るために私たちにできることが何か、まさに問われている。そこで、メインテーマを「新しい生活様式の中で養護実践を論文化するには」とし、サブテーマを「子どもと子どもを取り巻く人々のいのちと健康を守り、育み、ささえ、つなぐために」と設定した。

メインテーマに象徴した「新しい生活様式」で過ごす子どもたちは、休校期間を終え学校再開を経た現在も、安心・安全の確保や心身の居場所の確保が容易ではなくなったと考えざるを得ない。自粛生活で直接的な交友活動の制限により思い通りに友達と遊べず、教育分野の IT 化の遅れで学習機会が失われた他、家族間の緊張や不安が高まった者も少なくないだろう。繰り返す緊急事態宣言によって、子どもにとって新型コロナウイルス感染症に対する脅威が助長されている。このような相次ぐ社会情勢の難局を考えれば、将来起こることを想定した危機場面に対する危機回避力や危機予測力、自己管理力の育成が教育現場では益々重要となる。

サブテーマに意図したことは、教育現場で子どもたちの心身の健康を見守り育てる専門職である養護教諭が、医療機関など関係諸機関との情報連携に加えて、目の前の子どもたちはもちろんのこと問題を抱える家庭や保護者を早期に発見し、支援体制を調整していく仕組みづくりの要となると考えられたからである。まさに、現場の養護教諭は、新しい生活様式の中で子どもたちの命を守る橋渡し役を担う現状があると考ええる。

2020 年 12 月に開催された「子どものからだど心・連絡会議」の研究会では、養護教諭は、心身の不調を訴える子どもの対応や感染予防などで多忙を極めている状況が報告された⁶⁾。講演者は、このコロナ禍の影響が懸念される現況において、子どもたちの不安を少しでも減らしたいという養護教諭目線で、学校危機対応を自身の研究のテーマに掲げて実践研究を継続する立場である。その延長線上で、「がんばれ高学年キャンプ」という実践プランを立案し、最大限に感染症対策を講じ人数制限を行い、小集団でのキャンプを試行し実践介入に至った。キャンプに参加した児童は、友達と共有した時間を大切な思い出として多様なコメントを述べていた。難しい活動や初めての活動であっても、体験の楽しさから参加意欲が備わり、次の活動に向かう成果も得られている。これらの知見と調査分析結果を踏まえて、児童生徒に有益なプログラム内容を綿密に精査すれば、野外活動に依拠した小集団での学びの意義は大きいと考えられたので、基調講演の柱として、【コロナ禍での養護実践】を取りあげた。

②実施概要

講演者が 2020 年度に取り組んだ研究テーマの 1 つである「コロナ禍における野外活動体験

がもたらす影響と事例検証—小学生の実践事例に基づいて—」などの先行調査を以下に紹介する。

西條らの先行研究⁷⁾⁸⁾によれば、日本の子どもの前頭葉機能が1980年頃から幼児化傾向にあり、その一要因として、外遊びや群れ遊びの減少による身体運動不足やコミュニケーション不足があると指摘している。一方で、キャンプ経験が子どもの大脳活動に与える効果測定を通して自然体験活動の意義を検証する研究は少ない⁵⁾と言及していることに着目した。

また、休校中に子どもの心身の変化について調査した先行研究結果を探ってみると、日本体育大学の野井氏が議長を務めるNGO「子どものからだと心・連絡会議」と同大研究所との共同調査(2020)⁹⁾にたどり着いた。野井氏らの調査では、休校期間中と登校再開後において、東京、神奈川、埼玉、静岡の4都県の公立小中学校計31校の協力を得て調査が実施された。さらに、2020年12月に開催された「子どものからだと心・連絡会議」の研究会では、学校の養護教諭は、心身の不調を訴える児童生徒の対応や感染予防などで多忙を極めている状況が報告されている¹⁰⁾。

これらの先行研究から、本学会では、コロナ禍において試行した野外活動施設によるキャンプ体験を通じて、得られた見解を【コロナ禍での養護実践】として基調講演に位置づけ報告した。筆者が野外活動による運動不足の解消の必要性や有効性について調査しようと実践介入した一部を、子どもたちが活動する姿を写真で紹介しながら伝えた。長期休校や非常事態が布かれたことで子どもが様々な不安を今も抱えていることが予測される中、仲間と共に野外体験をすることは有意義であった。コロナ疲れを乗り切る方策としてメンタルケアの一步が主体的に構築された研究成果の一端である。養護教諭自身が日々の養護実践を『省察』することから言語化が進むと考える。また、一つの実践事例を省察する時に重要なことは、実践事例を通して【課題意識】を持つことの重視である。

そこで、具体的に筆者が【課題意識】を抱いた背景から研究テーマと仮説の設定、目的、方法、展望と課題までを「緒言」「研究テーマ設定の3条件と研究の背景から導かれること」「研究テーマに添った目的と方法の検討」「自然体験の実践介入を楽しむ」「事実を示す結果は過去形、考察は現在形で区別」「まとめ」と項立てして、筆者が養護実践で留意したことと研究のプロセスとを結び付けて報告するようにした。例えば、子どもの姿を表現する工夫の一つとしてキーワード化することで、研究の目的や方法を簡潔に示すことを再確認した経緯を説明した。また、研究の見通し(手立て)、こうすればこうなるだろう(目指す姿)の関係で【研究仮説を構築(設定)】する意味を考えることで、調査対象者や実践研究のポイントが示され、検証方法を明らかにしやすくなる利点について補足した。

③成果と課題

基調講演に続くオリジナルなライブ企画は、実際に論文化を進めたプログラムであった。そのためにその素地となる基調講演を到達目標として報告したが、「質疑応答の時間が欲しかった。」「1枚のスライドの字数が多く、内容が重厚で理解に時間がかかる場合があり、見過ごし

たものもありました。」などの参加者からのコメントに応え、学術集会終了後に限定公開の追加配信に至った経緯があり、結果的に一定期間オンデマンド型配信が叶う形となった。このように参加者のアンケート記述を後に反映できたことは、オンラインのメリットと言える。

しかし、基調講演は事前録画によるライブ配信で、講演と座長のまとめで時間配分をしたために、リアルタイムで質疑応答の時間確保ができなかった点が課題として残る。一方、基調講演視聴者の感想によれば、「講演内容などは問題ない。双方向のものは課題がある」「基調講演は、実践を通じた研究の進め方が詳細に示されていた」「基調講演はタイトルに相応しい、学会長の研究知を教えていただいた。」との回答も得ている。さらに、「新しい生活様式の理念が基調講演、特別講演、特別研究発表、シンポジウムに貫かれていて今後の企画を行う上で参考になった」や「内容がとても質が高く、明日からの執務にすぐに役立てることができる。また、自分もぜひ実践を論文にしてみたいと思われた。」など、その後のプログラムに繋がる学術集会の趣旨に沿った記載もみられたことから、基調講演のテーマに掲げていたことは到達目標に近づいたと言えよう。

(2) 特別講演

①運営趣旨と目標

本学会は、永井利三郎氏を講師に迎え「自閉スペクトラム症の考え方と支援の実際—新型コロナウイルス感染症流行の中で—」というテーマで講演を催した。講演の趣旨は、自閉スペクトラム症の支援のあり方について、これまでの知見を参加者に言及するだけでなく新型コロナウイルス感染症に伴い現場の養護教諭が直面している発達障害児の困り感のアンケート結果の一部を伝えることにあった。

②実施概要

内容は、自閉スペクトラム症の具体的な感覚特性について、動画等を用いて解説があり、自閉スペクトラム症の支援のあり方を医学的立場から教育者目線で説明した。なお、具体的な支援の方法だけでなく、学校現場の養護教諭にアンケートを実施した結果の一部を紹介したものである。本調査では支援学級及び支援学校の養護教諭が直面する困り感を主に調査しており、共有現場の養護教諭の【課題意識】を知る良い機会となった。

③成果と課題

本講演は事前録画の上、ライブ配信としたが、学会後の参加者からの要望により期間限定でオンデマンド配信した。このように参加者の意見を反映し、後日配信できることは【オンライン学会開催のメリット】の一つである。参加者のアンケートからは、「covid-19 流行下における養護教育の現状や課題などを知ることができた。」「特別支援についてもあらためて確認することができました。」といった感想が多数あり、新型コロナウイルス感染症における自閉スペクトラム症の児童生徒を抱える養護教諭の困り感のアンケートの結果を伝える貴重な機会だったと言えよう。本学会としても、養護教諭が感じた困り感に視点を当てたアンケ

一トの実施は大変重要な項目であったと考えられ、今後は回収したアンケートをどのような形で学校現場に還元していくかが課題である。

(3) 特別研究発表

① 運営趣旨と目標

学校現場における問題が多様化している現在、養護教諭に求められる仕事も多岐にわたっており、これまで蓄積されてきた養護教諭の教育実践成果を研究論文という証拠として残り、共通の問題を抱えている多くの養護教諭で共有することが必要である。また、【教育実践の論文化】は、新たな世代の養護教諭にとっても、一からのスタートではなく、これまで蓄積されてきた教育成果を活かしたスタートになり、今後より一層、多様な対応を求められる教育現場において大いに還元できることと思われ、教育実践成果を客観的な研究論文として示す意義は大きい。

今回の特別研究発表では、現役養護教諭として、日常的に養護実践に携わり、そこでの成果を研究論文として執筆した経験を持っている養護教諭と、今まさに研究論文を作成しようとしている養護教諭の二人に養護教諭の【教育実践をどのように論文化】しているのかを発表を依頼した。養護教諭の教育実践を科学的に整理し言語化すること、さらに新しい生活様式の中で研究の進め方がどのように変化するのかについて、教育学、看護学、保健学、福祉学等、多分野において議論を深めると共に、今後、養護教諭が研究を進める、あるいは始めるための実践的な示唆を得られるようにすることを目的とした。

②実施概要

二人の養護教諭が論文化の経緯を発表し、その後座長、発表者が全員登壇して、ディスカッションを行った。発表者への質問は、事前に大会ホームページを通して質問を受けつけた。また、当日も Zoom のチャット機能を使用し、質問を受けつけた。

第一発表者は「社会人大学院生となるまでの歩みと現在の研究経過」というテーマで修士論文作成の経過を発表した。修士論文の研究テーマは「養護教諭とスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーとの効果的な連携の在り方に関する研究」であり、「現代的な課題を抱えた子どもたちがよりよく学校生活を送るためには、養護教諭・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーとの連携が必要不可欠ではないだろうか」という仮説を立て効果的な連携の在り方を実証している。養護教諭・スクールカウンセラー(SC)・スクールソーシャルワーカー(SSW)を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した経緯について発表した。また、社会人大学院生として、進学した経緯や大学院での学びの実際についても述べた。

第二発表者は、「養護実践に研究の視点をいれて論文化するまでの歩み」というテーマで、知的障がい・発達障がいのある高等部の生徒への個別歯磨き指導において、生徒の課題に対し個々の発達段階や障がいの特性を考慮し工夫してきた【教育実践を論文化】した「特別支援学校（知的障がい）高等部における効果的な個別歯磨き指導についての一考察」について

発表した。その際、古田¹¹⁾の投稿論文の書き方¹⁴⁾を引用しながら、論文化の流れを示した。

③成果と課題

ディスカッションでは、養護教諭の行う教育実践を科学的に整理し言語化すること、さらに新しい生活様式の中で研究の進め方がどのように変化するかについて議論を深めた。問題意識をもって、日々の養護実践を記録すること、その蓄積が次世代の財産になることを確認することができた。

また、コロナ禍での日々の養護実践は変化しているものの、研究成果を活かして対応している具体的な実践についてもディスカッションの中で発表した。事前に提出された質問およびチャットの質問に回答しながらディスカッションを進めたため、すべての質問に答えることができずに発表時間が終了した。そこで、特別研究発表終了後に、チャットを通して個別に質問に答える形で対応したことは【オンラインのメリット】であった。

多くの質問が参加者から提出されていたことから、目的である「養護教諭が研究を進める、あるいは始めるための実践的な示唆を得られる」特別研究発表になったと考える。しかしながら、時間内にすべての質問について返答できなかったことは座長の時間調整の不備であり、発表時間が適切であったのか含め検討課題と考える。

(4) シンポジウム

①運営趣旨と目標

本学会は、養護教諭が行う教育実践すなわち「養護実践」を研究の中心に据え、養護教諭の実践（知）や経験（知）を言語化・体系化することで我が国における「養護学」の構築に寄与することを目指している。シンポジウムでは、養護教諭の実践（知）や経験（知）を言語化・体系化するプロセスを中心に解説を実施した。今学会では特に、新しい生活様式となった学校生活の中で、2人の実践者による実践事例についてコーディネーター（事例介入者・研究者）が問題点を抽出し、エビデンスのある研究論文にするための改善策をコーディネーターの助言をもとに協議し、養護実践研究のプロセスに対する理解を深めていくことを目標とした。

②実施概要

話題提供者の実践事例を研究的視点で捉えるための、ワークシート¹²⁾を活用し、研究へと組み立てていく段階の解説を実施した。

具体的には、話題提供者から、事例課題に沿って、研究に至る動機や研究の背景、【研究仮説の設定】や研究方法などの事例概要とワークシートに記載する点でのポイントについての解説を実施し、その後、話題提供者から、ワークシートに沿った研究へと組み立てていく第1段階の仮説の設定から第4段階の分析結果までの4つの段階について解説し、コーディネーターとの協議と、チャットによる参加者からの質問についての協議を実施した。そして、研究を行っていく上で陥りやすい問題への対策や日常の実践の中での現象を研究的視点として捉え、研究を体系化していく道筋の理解を深めていった。

事例課題①では、新しい生活様式に伴う教室の常時換気状態での環境変化が心身に与える影響についての研究から、量的研究の特徴的な点について発表を行い、コーディネーターとの協議を30分間実施した。事例課題②では、新しい生活様式における学校生活で、不安などの心の支援が必要な保健室来室生徒に対する養護教諭のアプローチに注目し、養護教諭が実践知や経験知を活かして生徒の問題の見立て、実践に至るそのアプローチについて事例検討を実施した。そこから、【研究仮説を構築】する過程について、コーディネーターとの協議を30分間実施した。その後、チャットによる参加者との協議を30分間実施した。

③成果と課題

ワークシートの活用之际には、十分に到達したとは言い難く、先行研究、特に養護実践学研究的熟読が必要であったと省察する。しかし、今回はワークシートを使用して研究に至る過程についての解説を実施したことで、研究のプロセスが理解しやすい構成になっていたと考える。そのため、質問者からは、日々の実践を研究に繋げていきたいという意見が得られたのではないかと。

話題提供者からは文献検索の具体的な方法について解説され、研究の事前準備として文献検討の必要性について解説を加えることができた。全体を振り返ると質問者への応答も活発にでき、多くの関係者の協力を得られたことで充実したシンポジウムとなった。

(5) その他のプログラム

1) 一般演題発表

①運営趣旨と目標

前年度のオンライン学会では企画されていない一般演題発表では、養護教諭自身が日々の養護実践の成果を発表するだけでなく、学会の参加者が演者の養護実践を知る機会となり、現在自身が行っている養護実践の新たな切り口のヒントを得ることを目標とした。さらに、発表後の質疑応答の時間に、参加者から研究に関する質問が活発に行われることで、演者自身の【教育実践を論文化】する上で重要な意見やこれまで演者が気づかなかった新たな視点を知ることを目指した。実際に参加者アンケートでは「養護実践における新たな視点を得ることができた」との回答が得られた。

②実践概要

養護教諭の実践や研究論文化に対する敷居の高さを指摘する声がある。竹鼻ら¹³⁾も「養護教諭の学問的な研究は遅れており、養護教諭が行う児童生徒への実践成果のまとめが行われていない。」と述べている。養護教諭の実践発表や論文化のハードルの高さとして様々な因子が考えられるが、その一つに多忙さが考えられる。また、山田ら¹⁴⁾によれば養護教諭の多忙さの要因として相談活動の割合が増加していることが示されている。

昨今の新型コロナウイルス感染症対策の実践なども相談活動の増加に影響すると考えられ、日々の養護活動を研究的視点で捉え、より根拠に基づいた実践につなげていくための研究やエビデンスのある実践が必要とされている。この現状から、「新しい生活様式の中で養護実践を論文化するには」を本学術集会のテーマとし一般演題の募集に至った。演題の中には、新

型コロナ感染症に関する養護実践研究もあった。新型コロナウイルス感染症の予防対策については、教育委員会のマニュアルを基に各校で作り返えるなど養護教諭に求められる役割が多くなる反面、手探りで最善策を講じている。一方、他校の養護教諭の実践が周知される機会は少ない。アンケートからも「コロナ禍での現場の保健室でどういう生徒が来室しどう対応なされているか、また、それまでとコロナ禍での来室数など、現場で働いている身としてはとても興味深い内容で勉強になりました。」という回答から、現場の養護教諭にとって今後の保健室経営に貢献したと言えよう。

③成果と課題

今回の発表は8演題であった。その8演題を3つのセッションに分けオンラインでの参加者自身が興味のある演題を選択し自由に移動できるように設定した。

演者の内訳は、大学院に所属する養護教諭と大学教員、あるいは養護教諭と大学教員が共同演者となっている演題や養護教諭の育成に長年携わった行政経験者との共同研究もあった。斎藤ら¹⁵⁾によれば、養護教諭に関する演題が年々増加しており、発表者の所属の割合が「大学のみ」は減少傾向にあり、大学と現職および現職のみが増加傾向にあると指摘している。本学会の一般演題の発表者の傾向も斎藤らの研究の傾向と当てはまる。過去に開催された学術集会と比較すると、現職養護教諭の学会員による一般演題発表は、半数以上が大学教員との共同研究で同じ傾向がみられた。本学術集会では大学院に所属している現職養護教諭による演者の割合が増えている。これらのことから、田嶋⁵⁾が述べるように本学会の設立趣意書に書かれている「養護教諭の実践（知）や経験（知）を言語化・体系化することで我が国における『養護学』の確立を目指すこと」が現職の養護教諭に徐々に浸透しつつある。

発表の中には、教育的視点からの実践報告に留まる演目が見受けられたので、学術的視点からの実践研究を増やして、一般演題の発表者が論文投稿を目指すステップアップの機会とすることが望まれる。そのためには、一般発表では内容を精査し、発表演題数を増やしていくことを優先すべきではないだろうか。また、養護教諭は、日々の業務を遂行するだけにとどまらず、【教育実践の論文化】を実現するには、自己の実践を振り返り自身が行った実践を検証する視点や方法について記録の整理など第三者から直接助言をもらう機会や研修が少ない現状がある。特に、実践の集約や省察は、客観的かつ研究的視点で分析することが単独では難しく、養護教諭独特の職場環境から日々の実践を発表し、論文化へのハードルの高さに直面していることが課題である。

2) オンライン懇親会

①運営趣旨と目標

現場の養護教諭、次世代の養護教諭を担う学生、大学関係者が自由に意見交換し、懇親を深めると共に実践の論文化等それぞれの今後に役立つための時間とする。

②実施概要

オンライン懇親会は、学術集会終了後 17 時～18 時で開催した。参加者は現場の養護教諭

5名、学生2名、大学関係者7名の計14名が参加した。ZOOMのブレイクアウトルーム機能を利用して、3つのグループに分かれた。2回程グループを再編成した。自己紹介後、学術集会の感想、日頃の【教育実践の振り返りや論文化】について、学生の悩み相談など各グループで交流を深め、最後に参加者の了解を得て集合写真を撮った。そして、参観者の懇親を第一の目標としつつ、情報や意見交換から、現場の養護教諭が、日々の【教育実践の論文化】意欲を喚起させるきっかけとなることを目指し、学生は養護教諭や大学関係者と意見交換することで、学校現場の理解の進展と卒業論文作成の糸口や視点を探ることとした。

③成果と課題

オンライン懇親会での話やアンケート結果から、「論文を書きたくなった。文字として残したくなった。」「子どもも一緒に参加し、本音で喋り楽しかった。」「卒業論文作成に向けて、今日の学びは有益であった。」「ルームを変更しながら実践研究に向けた仲間作りができた。そして早速ラインでグループを作った。」「現場実践、論文化と現職者の大学院進学や研究生への道のり等、貴重な情報交流の入り口となり、これから拡げて活用したい。」「予想外の収穫であった。」「オンライン学会での懇親会という新たな企画に感謝したい。」などの前向きな意見が述べられたことは到達できた成果と言えよう。

しかし、参加者が少なかったことは課題である。参加者はオンラインで画面に一日集中することから疲労状態であったと推測され、表情が十分に読み取れず休憩方法を個々に委ね、相互に交流し難いことは【オンラインのデメリット】かもしれない。チャットには、「懇親会に参加しようと思いましたが、今回はこれで退出します。」というメッセージもあった。今後、学生諸氏には直前に再度アプローチするなど、より一層の広報が必要と考える。

V. 参加者アンケート結果と考察-2

参加者アンケートはGoogleフォームを活用して実施した。回答者数は69名であり、回答率は42.9%であった。回答者の内訳(図1)は、理事13%、評議員4%、会員35%、非会員48%で、職種別(図2)では、養護教諭48%(校種別:小学校19%、中学校12%、高等学校12%、特別支援学校4%、その他の校種1%)と半数を占めており、大学教員32%、学生(養護教諭養成大学)14%と続いた。年齢別(図3)では、50代の回答者が21名と最多で次いで20代が多く、40代が最も少ない回答数であった。また参加のきっかけ(図4)については、会員の知人27名、学会ホームページ22名、大会チラシ12名と口コミによる参加者が多いことが把握できた。

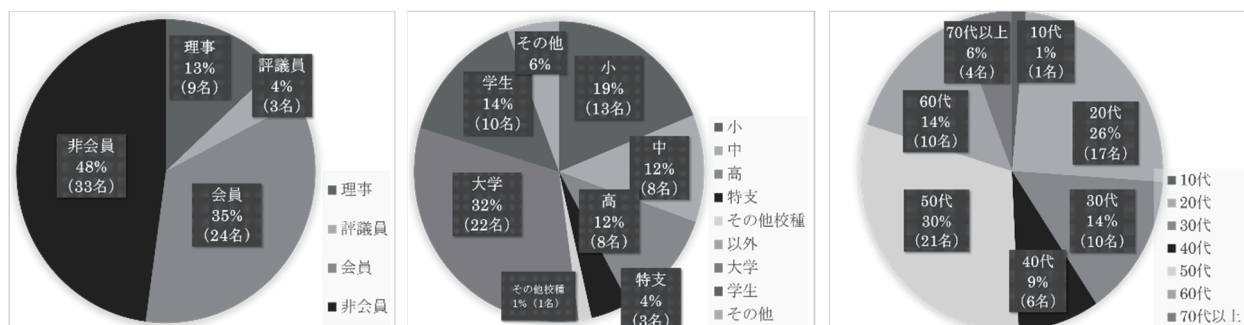


図1 回答者内訳の割合

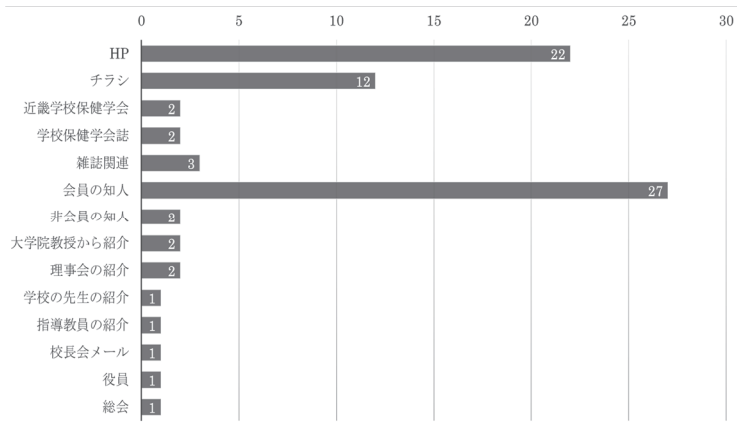


図2 回答者職別の割合

図3 回答者年齢別の割合

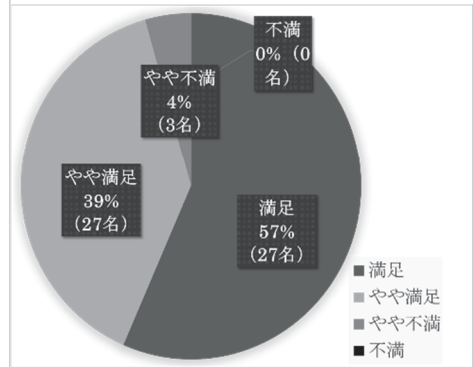


図4 学術集会開催を知るきっかけ (人数)

図5 回答者の満足度の割合

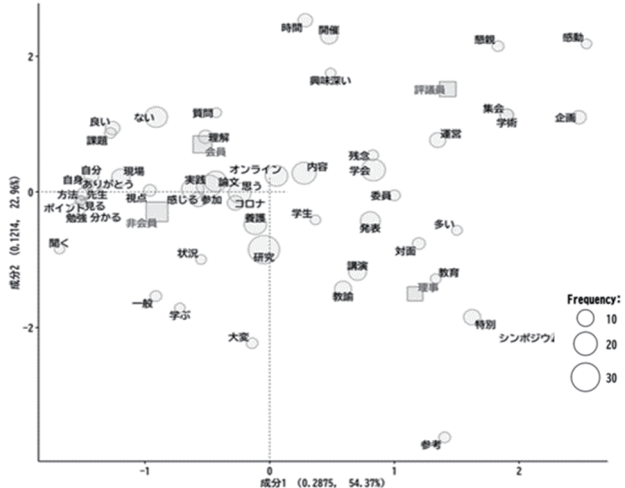
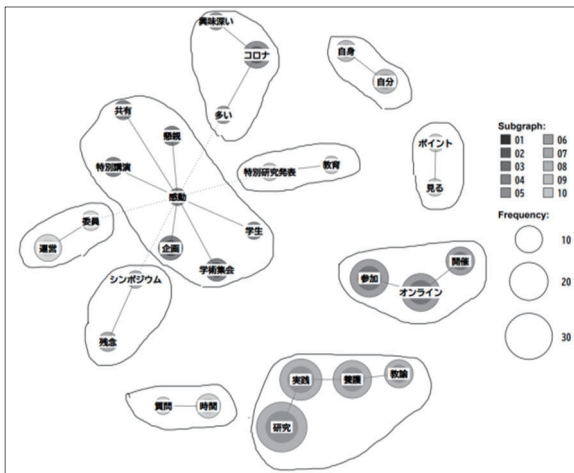


図6 満足度の理由の共起関係(出現単語の関係性)

図7 参加者別の満足度の理由の特徴

本学会に参加しての満足度(図5)をみると、満足57%、やや満足39%、やや不満4%、不満0%であり、満足度の理由の自由記述欄では、「感動した」「オンラインで参加しやすかった」など肯定的な意見が多かった。学術集会の評価と課題を検討することを目的に、満足度の理由の自由記述欄をKHCoder3により探索的にテキスト分析を行った。まず満足度の理由の共起関係を検討するために、出現単語の関係を分析した(図6)。その結果、10グループの分類に読み取ることができた。出現数が多いグループは〔研究〕〔実践〕〔養護〕〔教諭〕であった。養護実践を論文化することを目指す本学術集会において想定通りの結果であったが、〔論文〕という出現コードが関係しておらず、養護実践の論文化の十分な効果までには至っていないことが窺えた。次に〔参加〕〔オンライン〕〔開催〕のグループが出現数が多く、対面開催ができなかったが、オンライン開催によって参加できた方が一定数いたことを意味している。一方、関連性の多い頻出語は〔感動〕であった。〔学術集会〕〔特別講演〕〔シンポジウム〕〔特別研究発表〕〔懇親

など、本学術集会の様々な企画と関係しており、参加者にインパクトを与える運営が成し遂げられたと評価できる。

さらに参加者別に満足度の理由の特徴を検討するために、対応分析を行った(図7)。会員の特徴は「論文」「質問」が近接しており、論文化への【課題意識】の醸成、質問による積極的な姿勢が裏付けられた。非会員は「勉強」「分かる」「視点」「感じる」と近接し、日ごろの実践の振り返りや自己研鑽につながったことが連想できる結果であった。一方で、理事や評議員は「教育」「対面」「運営」「企画」と近接し、学術集会の対面開催や教育的効果など企画運営への評価に関する結果であった。

期待するテーマは、「保健教育について」「心理的に悩んでいる生徒へのアプローチ」「コロナ渦における不登校支援、いじめ差別への支援、貧困など養護教諭にできること」「健康相談とSC、SSW、学校医との連携について」「支援が必要な子どもへのアプローチについて(貧困・外国人・障害など)」「性に関する個別指導について」など、まさに学会に象徴される養護実践や養護教諭の職務に直結する多様な意見があり、今後の学会の充実や発展に繋がる具体的なテーマであった。さらに、その他の自由記述によれば、子育て中の女性の参加者から「オンラインによる開催だったので参加が容易であった」などの記載があり、対面では参加できないであろうと思われる層からの意見と捉えられた。

VI. 学会企画全体の結果と考察-3

上記の回答者の意見に示されたように、オンライン開催の企画運営は参加者の期待に沿い、概ね満足が得られている。とりわけ、図6の満足の理由についてテキスト分析結果から、「感動」を主軸に「学術集会」「企画」「共有」「学生」「懇親」が強く共起しており、本企画に対して養護教諭を目指す学生らが学術集会や懇親会に参加し、共有できた状況が成果に現れており、学会の展望に繋がったと考える。また、「養護」「教諭」「実践」「研究」の強い結び付きから、本学会の根幹と趣旨に通じる土台のネットワークとして表出していることがわかる。

しかし、本学術集会のオリジナル企画であった特別研究やシンポジウムは質問の内容によって、論文化と実践をどう掘り起こすのか、どう改善したのかの協議の軸づくりが難しかった。実際に、専門的なバックグラウンドの質問が少なく、学術的な質問が少なかった。図6の共起ネットワークからも、「シンポジウム」と「残念」が共起しており、「時間」と「質問」の共起が「企画」や「感動」から離れて布置されている。シンポジウムでは、実践的な質問が多く、学術的な専門性の担保を考えると、参加者の要望に呼応仕切れなかったと考えられる。これらは換言すれば、参加者の過半数が現場の養護教諭で、教育現場の養護教諭の声が多く出されたためであり、多くの質問に対して、現職の養護教諭(発表者)が的確に回答したことは本学会の趣意に近づく成果と言えよう。

一方で、ライブ配信した企画プログラムは、一見成功裏に終わったかのごとく捉えられるが、今日のコロナ禍において日頃の養護実践を果たして研究的視点で捉え直しができたのか明らか

になったとは言い難い。加えて、参加者の多くを占めた現場の養護教諭が、【教育実践の論文化】に繋がる【課題意識】を見出すきっかけに留まることも懸念される。とりわけ、運営上の主たる困難点は、対面開催のように参加者の様子や表情がわかりづらいことから生じる質疑応答の想定や調整と時間確保の問題である。各プログラムについてチャットを見ながら、全ての事に対応する進行の大変さや効率性との両立の難しさ等があったと省察する。

したがって、【課題意識】を見出した養護教諭が次のステップとして邁進し、論文化を目指すためにも研究者のサポートが得やすい人的環境やステージを提供する企画運営の工夫が求められる。そして、論文化の研究意欲を持続するには、事例提供者と研究介入者が協働するのみでなく、若年層や子育て層など年齢問わず参加者が一体となって創り出す企画進行が望まれ、そこには学会運営自体の長期的見通しや検討が不可欠と考える。

VII. まとめ

オンライン開催で行なうことはメリットとデメリットの両側面があるが、実際には、ハイブリッド、動画配信、動画視聴、オンデマンドなど、色々な方法を駆使し、できる限り対面に近い学会を目指して企画検討することが可能であった。その成果がアンケート結果から得られている。コロナ禍におけるオンライン開催は他学会でも普及している現状があり、本学会においても北海道から沖縄まで全国から参加があったことは意義がある。また、プログラム内容の検討会議（運営委員会）をオンラインで進めていく過程において、養護学ではない他領域の運営委員の意見から、「教育現場の養護教諭の方々と関わる機会が持てて良かった」という示唆や「養護教諭の未来のために他領域の大学教員に何ができるのか考えるきっかけとなった」など建設的な意見が述べられたことも発見である。さらに、オンライン懇親会参加者からは「日頃取り組んでいることを文章にまとめたい」と論文化の意欲を直接、運営側に表明していた。

すなわち、養護教諭専門領域外の他（多）領域の研究者と行政経験者、現職養護教諭諸氏が運営委員の構成メンバーとして参画し、企画進行を検討して取り組むことで、双方に刺激を受け運営上多様な意見が得られて研究的視点の幅が広がる結果となった。報告論文をまとめるにあたり、参加者からのリアルな反応が目視できる対面の良さを改めて体感する場面があり課題は残るものの、今後の学会企画の参考となる幅広い年齢層を視野に入れて企画する必要性がうかがえた。これらの省察から今後もオンライン学会運営に寄与すべき更なる展開を追究する。

謝辞

本学術集会の企画運営にあたり、運営委員として多大なご尽力をいただいた現職養護教諭・大学教員・事務局職員諸氏をはじめ、本学術集会にご参加いただいた皆様方に心より深謝申し上げます。ここに敬意を表します。

あとがき

八木利津子（桃山学院教育大学）は、筆頭著者として目的・方法・基調講演報告を中心に特別講演等の結果報告・考察・まとめ等の全編作成と総括を担当した。以下本学術集会開催を終えて省察するにあたり、共著者の運営委員としての役職と報告論文の分担執筆について述べる。

米野吉則（兵庫大学）は運営委員長として参加者アンケートのデータ入力と調査分析を担当、平松恵子（姫路大学）と新沼正子（安田女子大学）は副学会長として草案校閲を担当、安達有梨（桃山学院教育大学）は事務局委員として先行研究の調査と一般演題発表報告を分担、池田友美（摂南大学）と三宅孝昭（大阪公立大学）は特別研究発表座長として特別研究プログラム報告を分担、高島智香（京都市七条第三小学校）は研究発表者としてコメント付記、古株ひろみ（滋賀県立大学）はシンポジウムコーディネーターとしてシンポジウムプログラムの報告を分担、中島道子（長浜市長浜南中学校）と矢本良江（京都府立山城高等学校）は話題提供者としてシンポジウムコメント付記、錦川由美（桃山学院教育大学）は事務局長補佐としてオンライン懇親会報告を分担、宮坂政宏（桃山学院教育大学）は事務局長として全編校閲、徳山美智子（元大阪女子短期大学）は本学術集会アドバイザーとして全編完成に向けて助言など、皆様のご協力に感謝申し上げます。

註）引用文献

- 1) 古田真司, 桜木惣吉, 山田浩平他 19 名「科学的根拠（エビデンス）に基づく養護教諭の職務に関するガイドライン作成に向けての文献研究」日本教育大学協会全国養護部門研究委員会, 2019
- 2) 徳山美智子「養護学」体系化への道程―「日本養護実践学会」と「養護実践学研究」の果たす役割の重要性― 養護実践学研究 2 巻 1 号, pp1-4, 2019
- 3) 村松常司「日本養護実践学会と学会誌『養護実践学研究』養護実践研究 1 巻 1 号, pp1-2, 2018
- 4) 渡辺美恵・山田小夜子・土田満「養護教諭の研究活動と職務への自己効力感との関連―研究活動の現状についての調査結果の分析― 東海学校保健研究, 38 巻 1 号, pp45-56, 2019
- 5) 田嶋八千代「養護教諭の職務を研究的視点から捉える」 養護実践学研究, 第 2 巻 2 号, pp1-2, 2019
- 6) 野井真吾, 鹿野晶子他「速報！コロナ緊急調査―with ココナ, post コロナ時代の「育ち」と「学び」を考える！―（子どものからだと心・連絡会議編）, 『子どものからだと心白書 2020』 pp. 8-11, ブックハウス・エイチディ, 2020
- 7) 西條修光, 森山剛一, 慰斗謙一, 熊野晃三, 杉本和世, 阿部茂 明, 正木健雄:「子どもの大脳活動の変化に関する研究」, 『日本体育大学紀要』 16 巻, pp. 61-68, 1981
- 8) 寺沢宏次, 西條修光, 柳沢秋孝, 篠原菊紀, 根本賢一, 正木健雄:「子どもの GO/NO-GO 課題と生活調査 ―日本 1998 年と中国の 1984 年を比較して―」『国立 オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』, 創刊号, pp. 35-43, 2001
- 9) 平野吉直, 篠原菊紀, 柳沢秋孝, 根本賢一, 田中好文, 寺沢宏次:「子どものキャンプ経験が大脳活動に与える効果-go/no-go 課題による抑制機能への影響―『野外教育研究』6 (1), 日本野外教育学会, pp. 41-48, 2002
- 10) 京都新聞:「精神面は改善, 身体面悪化も」『コロナ休校・再開子どもらへの影響』12 月 18 日付朝刊, 2020
- 11) 古田真司. 「養護実践学研究」への投稿論文の書き方―学校現場の養護教諭の皆様に向けて―, 養護実践研究, 1 (1), 97-101, 2008
- 12) 高田しずか, 上村弘子, 八木利津子, 高田恵美子, 菊池美奈子, 池川典子, 大川尚子, 岡本幹子, 加藤直子, 楠本久美子, 久保加代子, 米野吉則, 野手麻里奈, 藤島祥子, 本田史歩, 棟方百熊, 安川裕子, 吉田かえで, 渡辺明美, 徳山美智子:「ワークショップ「日々の実践を研究的支店にとらえる」の開発と今後の展望『養護実践学研究』2 (2), pp. 63-71, 2019
- 13) 竹鼻 ゆかり, 古田 真司:「養護実践学の論文を誰が書くべきか―養護実践を論文化する意義とその方法についての考察―」『養護実践学研究』3 (2) pp. 3-8, 2020
- 14) 山田 小夜子, 橋本 廣子:「養護教諭の職務の現状に関する研究」『岐阜医療科学大学紀要』(1881-9168)3 号, pp. 77-81, 2009
- 15) 斉藤ふくみ, 堀内久美子:「養護教諭に関する学会発表演題の動向―日本学校保健学会および日本養護教諭教育学会の分析から―」, 『熊本大学教育学部紀要, 人文科学』, 第 53 号, pp123-131, 2004

参考文献

- 1) 八木利津子:「コロナ禍における野外活動体験がもたらす影響と事例検証」『日本幼少児健康教育学会第 39 回大会プログラム・抄録集』, pp. 32-33, 日本幼少児健康教育学会, 2021

- 2) 八木利津子：「新型コロナと共存する養護実践と研究の歩みに備えて」『養護実践学研究』4（1），1-2，日本養護実践学会，2021